

壁復活望む不条理

ベルリンの壁が消えてから20年、東西冷戦の最前線だった欧州に、有形無形の「壁」ができています。

ユーロ硬貨を握りしめた人たちが、教会の敷地内にあるれんが造りの建物の前に長い列をつくっていた。

ベルリン東部、旧東ドイツのリヒテンベルク地区。生活困窮者を支援する団体が、スーパーから集めた消費期限が近い食品を配っている。並んだ人たちは1・5ユーロ(約20

20年後の壁 ドイツ

最近、ある世論調査が独メ



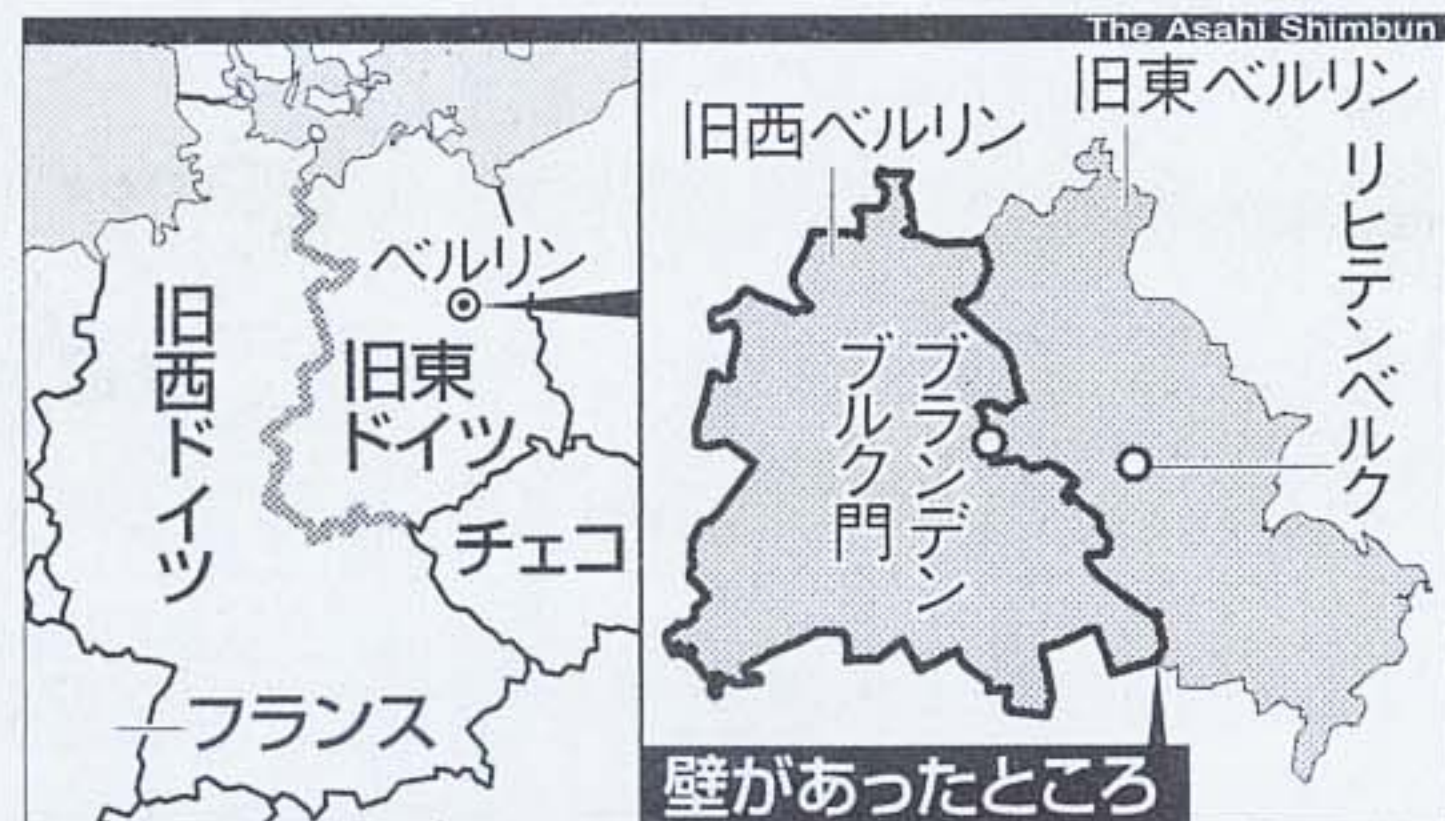
ベルリンの旧東独地域リヒテンベルクで、支援団体から食べ物を受け取る女性＝峯岸進治氏撮影

旧東 格差・差別に嫌気 ■ 旧西 続く負担に不満

ディアをにぎわした。民間調査機関フォルザが実施したもので、約1千人に「壁はあったほうがいいのか」と聞いたところ、15%がベルリンの壁の「復活」を望んでいた。

統一時、西独のコール首相(当時)は「数年後には花咲くようになる」と宣言した。道路などのインフラが整備され、生活水準も急速に西側に近づいたが、賃金の安い東欧諸国が次々に欧州連合(EU)に加盟してくる

統一時、西独のコール首相(当時)は「数年後には花咲くようになる」と宣言した。道路などのインフラが整備され、生活水準も急速に西側に近づいたが、賃金の安い東欧諸国が次々に欧州連合(EU)に加盟してくる



と企業投資などは減退。政府統計では、旧東独地域の失業率は旧西独地域の2倍以上も高く、平均所得は約3割も少ない。

統一から19年をへても、失業率、所得などの東西格差が埋まらないなか、9月の総選挙では、旧東独政権の流れをくむ左派党が躍進した。統一後、西側へのあこがれから、旧東独市民は自由主義経済を旗印にするキリスト教民主同盟(CDU)を支持する者が多かったが、そうした人びとが失望を胸に懐旧に走った結果とみられている。

「オスタルギー」という言葉が人びとの口の端にのぼることが増えている。独語の「オスト(東)」と「ノスタルギー(郷愁)」を組み合わせた

89年11月、ブランデンブルク門付近のベルリンの壁により登るベルリン市民ら。AP



冷戦で分断国家／民主化運動から統一へ

第2次世界大戦後、米英、フランス、ソ連が分割占領したドイツは、冷戦構造の深まりの中でソ連占領地域とそれ以外の西側占領地域の東西分断が進んだ。49年5月にドイツ連邦共和国(西独)が、10月にドイツ民主共和国(東独)が建国されると、完全な分断国家になった。

53年にソ連のスターリンが死去すると、東独で反ソ機運が高まり、米英などの支援を受けて経済発展を遂げた西側をめざす市民が増えた。労働力の流出を恐れた東独政府が61年に建設した、延長150キロにわたる西ベルリン境界上の壁がベルリンの壁だ。

その後東独は「社会主義の優等生」と言われるまでに成長したが、石油ショックの影響などで経済は再び停滞。80年代には独裁体制への反発が高まった。民主化運動の高揚を受けて89年11月9日、当時のクレツツ政権は西側への出国の自由化に踏み切り、ベルリンの壁は崩壊。翌年10月、東西ドイツは統一された。

「壁はあった方がいい」と答えたのは、格差、差別に嫌気がさした旧東独市民ばかりではない。旧東独支援のため

の「連帯税」など、負担が続くことに不満を募らせる旧西独の人びとの中にも壁を求め意識が働く。

独南部ミュンヘンでIT関連企業に勤めるクラウス・ヘルベルトさん(43)は、「金融危機などで収入は減る一方。統一後は旧東独支援は当然だと考えていたが、今は重荷と感じ始めている」と、この20年の心境の変化を語る。

今年、コール氏は79歳。10月31日にベルリンで開かれた壁崩壊20周年記念式典で東西統一について「統一を誇りに思っている」とたたえた。だ

が、統一の称賛が旧東独の否定につながる空気がいまの独社会にはある。東独出身で人権意識が高いと言われるメルケル首相も、旧東独批判をためらわない。

「互いに理解し合おうと努めることが必要だ」。旧東独を否定するだけではない統一のあり方を自著で主張し、壁を知らない若者からも支持されている旧東独出身の俳優ヘルベルト・ケーファアさん(88)は言う。

ワイマール共和国、ナチス・ドイツ、東西分断、そして統一ドイツの四つの時代を生きたケーファアさんは、正しい歴史認識が定着するまでにはあと100年かかるだろうと言う。確かに東独には「不正国家」と言える部分はある。壁の建設もそうだし、秘密警察もそうだろう。

「しかし、そこに生きた人びとの人生までもが不正だったわけではない。私たちは、自分たちが生きた『あの時代も良かった』と言える自由が欲しいだけだ」

ライプツヒ大学で文化や社会の歴史問題を研究するライナー・エッカート教授も「東独のシステムは全体として機能せずに崩壊したが、平等な教育、医療制度など、評価できるものもあった。こうした点を見失ってはいけない」と指摘する。

ケーファアさんは国民の心のなかで互いを排除し合う壁が高くなっていくことを心配する。「壁は自分を守ってくれる。しかし、出入り口がない限り、自分自身もそこから抜け出せない」

(ベルリン＝金井和之)